九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

SIA（Soaked in Asia）モンゴル編、タイ編に寄せて

髙樹，のぶ子
九州大学アジア総合政策センター ： 特任教授

https://doi.org/10.15017/16972

出版情報：九州大学アジア総合政策センター紀要. 4, pp.115-116, 2010-03-31. 九州大学アジア総合政策センター
バージョン：
権利関係：

(特別寄稿)

SIA（Soaked in Asia）
モンゴル編、タイ編に寄せて

髙**樹 のぶ子**
(九州大学アジア総合政策センター・特任教授)

切実に求められる物語＝モンゴル SIA

過酷な旅でした。ダシドンドグさんの故郷プレグハンガイ村のゲルでは、夜ともなれば零下に気温が下がり、寝袋に潜り込みます。首都ウランバートルでは昼間の気温が三十三度まで上がりました。ちょっと前までは腰の高さまで茂っていた草は消え、砂の竜巻、砂嵐が平原を舐めていきます。地球温暖化を肌身で感じながら、ダシドンドグさんと一緒に旅をした10日間でした。ゲルで泊まった翌日、すぐ近くで馬がオオカミに喰われて、その残りの肉をモンゴルコンドルがついばみ、さらに村で飼われているイヌたちが馬の腹に頭をつっこんで、旨そうに食べていました。

市場経済への移行でモンゴルには、ごく少数の勝者と大多数の敗者が生まれました。グローバルに国同士を比較すれば、モンゴル自体が、敗者に属してしまうかも知れません。

ともかく強くなりたい、という思いが各地で催される夏の祭りナーダム（弓、競馬、相撲の競技）にも感じられるし、朝青龍や白鵬賞賛の根底には、強い者への憧れがあります。

この草原で生きてきた民族の血です。まず強くなければ、何者にもなれないのです。

けれど、自由競争に耐えられず、ウオッカに逃げる敗者が増え、犯罪も増えています。この旅から戻って十日後に総選挙があり、不正を叫ぶ暴徒を鎮圧するために四日間の非常事態宣言が出されました。政治も劣化しているようです。

その犠牲者は、子供たちです。ストリートチルドレン、マンホールチルドレンも、社会主義時代には見られませんでした。私の作品のヒントになった孤児院では、両親の多くがウオッカのせいで社会から脱落し、父が母を、母が父を殺したという子供も四人いました。

それだけに、子供たちに物語は必要とされています。この孤児院でダシドンドグさんの「お話」を聞く彼らの表情は、アナザーワールドに魅入られたように輝いていました。ここでは、娯楽ではなく、教養でももちろんなく、食事のように必要とされているのが、物語です。

書くことで生活を成り立たせることは難しいけれど、作家と呼ばれる人は二百人、その中で四十人が児童文学者です。モンゴルの児童文学は日本でもいくつか紹介されています。

出版社（本）は三十社あり、新聞社は、各県ごとにある小規模のものを合わせれば百社に上るそうで、最大手の「デイリーニューズ」は購読数が一万。文芸誌 ZOQU（熾火の意）は、年に四回出されていて、ここには小説も掲載されます。これが人口二百六十万人の、この国の活字事情です。

ダシドンドグさんの本は、ソ連支配の時代には二万五千冊が読まれていたそうですが、今は五百部から千部だそうです。私の本を彼が訳して出版して下さるそうです。

(新潮第105巻第10号より転載)

男女を越えた第三の性＝タイ SIA

カム・パカーさんがなぜ「ぼくと妻」を書いたのかを理解するのはかなり大変だ。そもそも性を含む愛情関係はヘテロかホモかのどちらかに区分けされるという「常識」の中にいる私達は、この短編の事実関係を把握するのに、まず手間取ってしまう。けれど作者は、ロマンチックなラブストーリーのつもりで書いたという。パターン化された人間関係をいかに脱出して、純愛小説を創るか、創りうるか。カム・パカー

さんの悪戦苦闘の結果の作品である。

タイでは男女の二大性のほかに、中間的な第三の性が、法律上は別にして、意識の上ではかなり容認されている。公立高校で第三のトイレを作る動きもあり、また実際にバンコク市内の商業高校の放課後、何組かの男子グループが化粧をして出てきた。女子もそこに加わり、何ら違和感なくバス停で立ち話をしていた。

ゲイ、ホモ、オカマ、女装趣味、さらには心身が男女に分裂して生まれついた性同一性障害者まで、第三の性の様相も複雑多岐なのに、私達のほとんどは彼らの状況に無頓着で知識がない。人類は男と女しか無いことにしてしまったのは一神教世界で、一神教の桎梏から比較的自由であったタイで、第三の性が表面化しているのも当然といえば当然だろう。

けれど近代化とは詰まるところ一神教の先進国に追いつくことでしかなく、第三の性がおおらかに受容されてきた地方の生活は、「タイ化政策」により、「均質に清潔に知的に」均されようとしている。

この「タイ化政策」をカム・パカーさんは終始「病い」のようだと言った。「病い」をはねのけるために、彼女はもっとも先鋭的で新しい(それはタイ化政策以前には、タイの地方に在った) 関係を、ロマンチックなラブストーリーとして書いた、それが「ぼくと妻」だ。「異性愛や同性愛の枠ではなく、それを越えた恋愛を書きたかった」

何でも有りであれば、新しい関係性は成立させたはしからパターン化される。社会通念としての抵抗や壁が比較的弱い世界では、攻撃の的にならないかわりに、常に追いかけてくるパターン化から逃げ続けなくてはならない。

彼女の過激なエネルギーの源は、育った環境にある。彼女はまず「私はバンコク人ではない」と言った。チェンマイのそれもさらに田舎で育った。大家族の中で性的な言葉はごく日常的に使われてきたし、女性たちはタバコを吸いお酒を飲み立ちションし、二人の叔父はホモで、10人ぐらいのホモ友達が連日家にやってきて、チアガールの真似をして遊んでいた。「タイが目指す家族像」とはあまりに遠かったという。

日本では「表現の自由」を獲得するために描かれてきた性だが、タイではまた別の抵抗のために、描かれている。

(新潮第106巻第４号より転載)